

ひきよせ

発行所
天理教夕張大教会
〒068-0029 北海道
岩見沢市9条西6丁目21
☎ 0126-22-1248
FAX 0126-23-7275
yubaridai146@gmail.com
ホームページ
bariten.main.jp



LINE 友達登録
お願いします



迎春

あけましておめでとーございませす
今年も一年、世界中の人々が幸せに近づく事を願って、
存命のおやさまと共に歩ませて頂きたいと存じます。
よろしく願い申し上げます。

立教百八十六年 一月一日
天理教夕張大教会 会長

前会長 藤田大和
美重子
美田紀

役員一同

会長より皆様へ

年の初めに一言ご挨拶申し上げます。昨年一年間、大教会をお支え下さいました皆様のお力添えのおかげにより、心明るく通らせて頂くことが出来ました。本当に感謝しております。ありがとうございます。

さて、私たちは十年に一度、教祖とお呼びする 中山みき様が、たすけ一条の生き方として示された「ひながたの道」を、心を新たにしていります。普段は自分なりにコツコツと信仰し、暮らしている私たちが、この時ばかりは、心の判断基準を心機一転、教祖と一つに合わせ、世界たすけの為に自分の心と、時間をお供え致します。

ひながたの道を辿ることが、私たち信仰者の大事な目的で、この信仰を「道」と呼ぶのですが、私は教祖が大切と仰せになった心遣いを、自分が実際に守る事で、辿らせて頂けるのではないかと思います。

例えば、朝起こされるよりも優しく起こす事。水の味が美味しく感じられる体を喜ぶ事。物を寿命以上に長く使う事。いつも話し方が優しい

お知らせ

大教会元旦祭
春季大祭

1月1日(日) 10時
1月15日(日) 9時30分

大祭後、進級進学のお願いつとめ

各部署新年ごあいさつ

事。人の顔を立て、人に恥をかかせない事。陰でも人を褒める事。仕事は何でも自分がまずさせて頂く事。良いものは人にあげる事。我が子も人の子と同じ心で可愛がる事など、色々と教祖伝で学ばせて頂いた通りです。

これらが世の処世術と違うのは、教えられた心遣いをしっかりと守って通れば、「おつとめ」と「ひのきしん」を行なっている私たちには、この世界を創った親神様がおたすけに働いて下さるとい事です。

この道を、信じてほしい、分かってもらいたい。いつの時代も、道を弘める私たちの苦勞はこれに尽きると存じます。が、簡単ではないからこそ、教祖は五十年の歳月をかけ、ご自分で通って下さいました。

自分の事は良いから、教祖に喜んで頂く為に、誰かの助けになりたいという想いが、親神様に届けば、必ず不思議を見せて頂けますので、どうかご守護を信じて、今年も皆様と一緒に「道」を通して頂けますよう、よろしくお願致します。

大教会長 藤田大和



昨年は、おちばで3年ぶりに女子青年大会が開催。夕張から6名が参加(記事8面)

昨年は新型コロナウイルス感染の影響もありましたが、夕張大教会に繋がる皆様は一昨年よりおちばにおかえりいただく機会が増えたように思えます。

初席者や修養科、教人資格講習会の受講など話所も少しずつ対応をしながら安心しておちばがえりや修養できるようお願い取りをして下さっています。

また、おさづけの理拝戴に際しては、昨年同様、大教会長様とご相談しながらの対応となります。おさづ

けの理拝戴希望の方は是非ご連絡ください。

本年より年祭活動が始まります。本年も大教会の活動方針のもと、多くの方がおちばへお帰りくださり、更には別席をはじめ修養科、各種講習会にご受講くださいます事をお願い、日々では共にひのきしんをはじめ、にをいかけやおたすけにつとめてまいります。

私自身は普段の生活の中で教祖の教えが心地よい匂いとなり、周りの方々に良い匂いだなと感じていただけるよう励んでまいりたいと思えます。本年もよろしくお願ひ致します。

布教部 部長 高橋太志

明けましておめでとございませう。今年皆様方も心配されている状況が収束し、清々しい暮らしが戻りますよう、心から願っています。

本年の婦人会活動方針は「教祖140年祭に向かって、育つ努力、育てる努力に徹しよう」と打ち出されました。

婦人会長様はお話の中で、陽気ぐらしを実現していくには「台」となる道の女性の存在とその働きが大切。とにかく、お道の女性が元気に、明るく、勇んで下さることが私の一番の望み、とお示し下さっております。私たちは、いつも感謝の言葉「ありがとう」が口癖になるよう育ちたいと願っております。

三年千日の歩み出しは活動方針を踏まえて、いつも「ありがとう」の

笑顔の声かけが飛び交う婦人会を目指したいと思えます。

皆様、本年もどうぞ宜しくお願ひ申し上げます。

婦人会 主任 藤田美重子

明けましておめでとございませう。今年もよろしくお願ひ致します。

年祭活動の初年度となる本年、出張分會としても活動を活発にして参りたいと考えています。会員一人ひとりと繋がりをもち、それぞれの勇み心に繋がるよう、活動・行事を実施して参りますので、今後の分會よりの連絡をお待ち下さい。

少年会 団長 藤田豊

とりわけ、7月に予定している分會総会には、多くの会員に参加してもらおうよう、早くより呼びかけをしていきます。あらきとすりようとしての姿をたくさんの人に見て頂き、皆さんの勇みの種となる活動を少しでも多くさせて頂こうと思えます。

今年も青年会に、熱い声援、厚いご支援をお願ひ致します。

青年会 委員長 藤崎勇

昨年も子どもおちばがえりが中止されましたが（3年休止中）、規模を縮小した行事が開催され、夕張団として親子帰参をおすすめさせて頂きました。久しぶりに夏のおちば、詰所が賑やかになり、喜ばせて頂きました。

コロナ前の活動を取り戻すことに囚われ過ぎると、時々状況に不足

が出てくるかもしれません。今年も少しでもコロナの影響が少なくなるよう、少年会活動ができるよう準備を進めたいと思えます。まずは5月21日夕張団総会に、大勢の少年会員が集えるよう企画しますので、ご協力お願ひ致します。

夏の子どもおちばがえりは集まって楽しみ、それを間近に見ること、影響しあってムードが作られ、貴重な経験と喜びが得られると思っております。大人も子供も、もつと大勢の人たちがおちばに溢れることを楽しみに本年もつとめさせて頂きます。

学生会担当の富山です、今年もどうぞ宜しくお願ひ致します。

学生会は昨年より本部行事が少しずつ再開しつつあります。おちばもだんだんと賑やかになり、あらためておちばに運ぶ有り難さを感じています。

今年夕張の学生会委員長にもお願ひし、なんとか春の学生会おちば帰りを、計画していたいただいている所でありませう。これからのお道を歩むお互いでありませうから、なんとかおちばに帰る喜びを共に感じ、少しでも教祖様にお喜び頂き、ますます御教え通り歩めるように、学担としても努力して通らせていただきます。

どうぞ皆様にもご協力お願ひ申し上げます。 学生担当委員会 富山知一

月次祭の模様

十一月

朝晩は寒く、すでに冬の足音が聞こえる季節。祭典当日は、9時半より開扉献饌。祭文が奏上され、その後、座りづとめ・十二下りのてをどりがおつとめ奉仕者によって勇んで勤められた。

おつとめ後、上富良野分教会長、佐藤大輔役員が神殿講話をつとめた。佐藤役員は、まず夫婦が、銀婚式を迎えたこと、また会長就任後に、2度の年祭活動をつとめてきたこと触れ、「夫婦にまつわる御神言を胸に、子育てと年祭活動に打ち込んでいたが、いつしか妻との間には溝が生じ、根底の部分で繋がっていないような、何とも言えない不安を抱えていた」と当時の思いを吐露した。

そして、それは自らが未熟だった故、心に余裕を失い、最も大切な妻を粗末にしていたのだと、教祖伝逸話編137「言葉一つ」から気が付かされたと話し、「この逸話のような、『一切腹を立てない』という心定めだけでは足りない」と思い、「ありがとう」など、感謝、労い、褒める言葉を妻にたくさんかけるよう努めた。すると、妻との溝は少しずつ埋まり、自分自身も穏やかになっていったと話し、「存命の教祖には、これまで以上に『夫婦仲第一』を合言葉に教祖140年祭に向かうことをお誓い申し上げます、私の役目を終える」と締めくくった。

十二月

祭典当日、大寒波の影響から、各地で猛吹雪となり、大教会へ向かうことのできない方が大勢おられた。しかしながら、参集したおつとめ奉仕者ならびに信者とともに、本年納めの月の月次祭が執り行われ、開扉献饌、祭文奏上と続き、そして、一年を無事お連れ通りいただいた御礼を胸に、座りづとめ、十二下りのてをどり、陽気につとめられた。

その後、大教会長が神殿講話に立った。大教会長は、まず荒天の中、参拝に訪れた皆様へ御礼の言葉を述べた。続いて、今年一年を振り返り、「昨年、奉告祭に際し真実を寄せていただいたおかげで、おちばへ例年以上のお尽くしをすることができました。その理づくりと皆様の思いが重なり、今年はずつとつおちばにおかえりいただき、修養科生などを御守護いただき、私にとつては、い年になりました」と話した。そして、「遠く海の方へ向かうことは、今もご飯を食べられない子もいる。戦争で苦しんでいる人もいます。私に何が出来るのだろうと思えますが、私は自分の人生をお供えしたいと思えます。そして、皆様方のように、共に平和を願っている人がいるということ喜びに、これからも前向きにやっつけていきたいと思っております」と抱負を語った。(文 岩佐善昭)



教祖百四十年祭

本部巡教

年祭はたすけの旬、成人の旬

西浦忠一 本部長

立教 185 年 11 月 19 日
於 夕張大教会

本日は、教祖百四十年祭へと向かう年祭活動にあたっての本部巡教にお集まりを頂きまして、誠にありがとうございますとございます。去る10月26日、教会本部の秋季大祭において、真柱様より直々に諭達第四号がご発布されました。全教よぶほく信者が、諭達に示される真柱様の思いに心を揃えて、一手一つになって年祭活動を進めたいと思っております。そこでは夕張大教会の皆様方と共に、歩み方を色々と考えてみたいと存じますので、よろしくお願い致します。

教祖にお喜びいただく働き

人との出会いというのは、人の人生を大きく変えるものであります。例えば、素晴らしい師匠や恩師と出会って輝かしい人生を送る人もいれば、出会わなくていい人と出会ったが為に、本当に辛い人生を送る人も中にはいる。まず私達は、教祖と出会わせて頂いている、ということに感謝し、また喜ばせてもらわないといけません。また、今も存命の教祖が私達銘々を直接お導き下されています。

年祭活動において、非常に忘れられない出来事があります。30年前、私が名古屋へ布教に出て最初によぶほくになった、Kさんという奥さんがいます。それから今まで変わらず、毎日布教所に来て、神様の御用をし

て下さる。教祖百二十年祭の三年千日の時のことであります。当時私は、おちばと名古屋を行ったり来たりしていたんです。布教所の家賃が高くなってきて、その年の8月の講社祭の後、信者さん達に、おちばへ一旦引き上げようと思っている、と話をしたんです。信者さんたちも理解を示しつつ、最終的には、でもやっぱり皆が集まれる方がいい、という話をしていました。九月の講社祭の時、Kさんが、「先生私、夢見たんです」と言うんです。夢の中で、布教所のお社の前に、白髪の赤い着物のおばあさんが、お社に向って拝んでいた。それを見てびっくりして、目が覚めた、と言っています。周りの人たちは「それは教祖だ」と口々に言いました。その時に私は、申し訳ない、と思っただけです。年祭を前に、信者さん達には、「教祖、教祖」と事ある毎に話しているのに、自分は忙しくなったりとか、家賃が上がったとか言っただけ、そろそろ戻ろうかと思っただけなんです。それが恥ずかしくて、なんて申し訳ないことを思っただんどうと。こんなところにも教祖は来て下さるんだ、と反省させてもらったんです。

次の10月にも講社祭をしに布教所へ行くと、神様を祀っている六畳間の畳が新しくなっていたんです。Kさんに連絡を取ると、「先月の講社祭の後、教祖が来て下さったんだ、と

いう有難い思いとともに、こんなボロボロの畳のところに来て下さって申し訳ない、と思っただけです。それを聞いて、私は涙が出るほどうれしかったんです。こんな思いを持つてつとめて下さる人が他にいないだろうか。Kさんと私は、いわば理の親と子であります。この理の親を、涙が出るほど喜ばせてくれる、という事はどういう事だろう。自分は教祖に涙が出るほど喜んでくれるような務めが、果たしてできているだろうか。申し訳なさかみ上げてきました。年祭は、とにかくたすけ一条の親心にお応えする旬。何とか教祖にお喜びいただく働きをさせてもらわなければいけない、とその時肝に銘じたのであります。

諭達に書いてあることを、なるほど、そうだなあ、と思っただけでは、ダメなのであります。私たちは、何をすることも目的をしっかりとっていないと、うまくいかないものであります。コンセプトというものです。皆さん考えてみてください。何のために天理教ははじまったんでしょうか。なぜ親神様は天下られたのか。そしてその日から教祖は五十年に亘るひながたを通られた。そのひながたに込められた親心とは、一体なんなんでしょうか。そして明治二十年陰暦正月二十六日に現身を隠された。そして、今もなお存命でお

働き下されている。全て、何のためでしょうか。

苦勞は先の楽しみ

神様が私達人間に、初めて聞かせて下さった言葉は次の通りです。「我は元の神実の神である。この屋敷にいんねんあり。この度世界一れつを助けるために天下った。みきを神のやしろに貰い受けたい」。これ全て、世界一れつを助けたい、たすけ一条の一点にあるわけでありませう。つまり、立教に始まり、教祖のひながた年祭の元一日、そして存命でお働き下されている現在まで一貫しているのが、一れつ子供を助けたい、というたすけ一条の親心であります。

教祖が定命を縮めて現身を隠されたのは、おつとめを勤めて欲しいが為であります。そして広くおさづけの理をお渡しになり、積極的に世界だすけへ向かうよう、促されたのであります。そして今も、をびや許しやおまもり、御供さんを、おぢばへ帰れば頂けるのであります。勘違いされる方も多いのですが、あの御供さんのお米は、かんろだいではなく、教祖にお供えされたものなんです。あのお米は、存命である教祖に息をかけて頂いた、教祖の思いの込められたものなのであります。私が布教中に毎日読んでいたおさしづがあります。「この道は



常々に真実の神様や、教祖や、と言うて、常々の心神のさしづを堅く守る事ならば、一里行けば一里、二里行けば二里、又三里行けば三里又十里行けば十里、辺所へ出て、不意に一人で難儀はさゝぬぞえ。後とも知れず先とも知れず、天より神がしっかりと踏ん張りてやる程に。」(明20・4・3)とあります。私たちが

にとつて、教祖が存命でお働き下されている事が、とても有難いことなのです。そして日頃から、神様の教えを守って通ることが大切なんだとお教え頂いています。いかに素晴らしい教え、立派なひながたがあったら、それを実行して毎日を通らなければ、それは無いに等しいのであります。論達に「この教祖の親心にお応えすべく、よふぼく一人ひとり教祖の道具衆としての自覚を高め、仕切つて成人の歩みを進めるこ

とが、教祖年祭を勤める意義である」と、こうお示しくださっています。

教祖伝に、教祖が現身を隠された時のおつとめを勤めた、先生方の名前が載っています。参拝者は二、三千人いたそうなのですが、鳴物の手は足りていませんでした。それでも教祖は満足気におつとめの音を聞いていた、とあるんですね。手の足りない、しかし「命を捨てても」と覚悟の上で勤められた、先生方の心を喜びになっていたので。形よりも心、その心をお受け取り下された。

今も同じなのです。年祭活動に当たり、私がさせて頂くんだ、どうか教祖にお喜び頂きたい、という心を持つことが、何より大切なのであります。その心を教祖が受け取って喜んで下されるのです。私の名古屋布教中、毎月の講社祭には、父が母が来てくれました。父は寡黙な人で、講社祭に来てもあまり口を開きませんでした。そんな父が毎度帰る際に一言だけ「もつと苦勞をさせてもらえ」と言っていました。若い時分は「たまには褒めてくれても」と不足をしました。しかし今になって、父の言うとおり、もつともつと苦勞を求めていくべきなんだ、と思うようになりました。若い人は苦勞が嫌いですね。苦勞を不幸と思っている人が多いが、そうではないんです。「苦勞は先の楽しみや。苦勞は宝や」と言ってくれた父の言

ふしから芽が出る

葉が、今になって身に染みるのです。この三年千日は自ら求めて、ひながたを通る事が大切である、とお伝えしておきます。おさしづに「しんどの中に実がある。葉の中に実が無い。」(明32・12・6)とあります。年祭活動は、本部からまた大教会から打ち出されることに受け身でいるのではなく、皆さんそれぞれが自主的に取り組むことが大切で、その心を教祖に受け取って頂けるのであります。

では、この三年千日に具体的に何をやるのか、ということを考えてみましょう。論達にもありますが、「ひながたの道を通らねばひながた要らん。(中略) ひながたの道より道が無いで。」(明22・11・7)とのおさしづがあります。教祖五年祭を前にして、ひながたを通る事の大切さを、お説き下されたお言葉です。同じおさしづの中に「難しい事は言わん。難しい事をせいと、紋型無き事をせいと言わん。皆一つ／＼のひながたの道がある。」とあります。このひながたの道というのは、難しいことをしたり、特別な技能が必要だったり、というような道ではないのです。手本通りにすればいいんだよ、と仰っているんです。このひながたを通る、という事は今に至る、このお道の原則であります。これが、このおさ

しづの二つ目のかどめでありませう。そしてもう一つのかどめは、三年千日を通りなさい、ということですよ。教祖の五十年のひながたの内、わずか三年でいいから通ってみなさい、ということです。他方で、この千日が難しい、という話もされている。三年間ひながたを通るといふのは、日々弛まない努力と苦心が、やはり必要だということです。そしてこの三年間を通り切れば、必ず、必ず結構な道に導いて下さる、と請け負って下さっています。お互いに三年千日と日を仕切つて、ひながたに沿った教えの実践と、たすけ一条の歩みを進める心定めをして、陽気ぐらしに向かつて精いっぱい努力をする。そういうた姿を教祖にお喜び頂き、また道が進展するご守護をお与え頂きましょう、という思いであります。

ではひながたの道とは、どういう通り方をしたらいいのか。改めて論達を読むと「教祖はひながたの道を、まず貧に落ちきるところから始められ、どのような困難な道中も、親神様のお心のままに、心明るくお通り下された。(中略) この五十年にわたるひながたこそ、陽気ぐらしへと進むひながた一条の道である。」との節があります。水を飲めば…という下りはよく耳にするかと思いますが、これはどんな時も親神様のご守護を感じ取り、ありがたいと喜ばせて頂く、という事でありませう。心の持ち方ひ

とつで、いつでも神様のご守護を感じて、陽気ぐらしへ進むことが出来ます。

また、ふしから芽が出る、どんな難しい状況でも、神様に凭れて通れば、成人へと導いて下さる。成って行くことは、成人へと導く親神様のお手引きであるから、どんな中も先を楽しみに通るよう、とお教え下さっているのです。お道を信じていても、病気にもなるし、事情も起こってきます。「なんで？」という時がたくさんあるんです。お道がありがたい理由は、ちゃんと理由を聞かせてもらっているんです。全ては、私達人間を助けたがため、ふしから芽が出ることを教えて下さっているんです。これは本当にありがたいことで、知っていると知らないでは天と地ほどの差があるんです。ですから、これを知らない人に知らせるのが、私たちのつとめの一つであります。



御恩報じ、神一条、たすけ一条

今から20年以上前、立教160年に、大きなふしをお見せいただきまし。この年はこどもおちばがえりに力を入れ、160年の半分、80名を連れて帰ろう、と大風呂敷を広げたわけです。7月には60名程の帰参者が集まっていたが、私は心定めをしたにも関わらず「こんなもんだらう

な」という風に考えていました。おちばがえりの少し前に、信者さんのお見合いがあり、私と家内とその彼と3人でおちばへ帰ることになっていました。するとその日の朝に家内が「頭が痛い」と言い出し、とても連れていけないだったので、私が彼を連れておちばへ、家内は一人で病院へ行くことになりました。無事に見合いを終えて帰ってくると、暗い部屋の中で家内が座っていた。検査の結果を聞くと、網膜剥離ですぐに入院、手術が必要で失明の危険があるとの事でした。まさかの出来事に、不安と驚きが怒涛の如く押し寄せてきました。

夫婦で話し合う中、思い至ったのは、こどもおちばがえりの事でした。はじめは1軒からはじまった団参でしたが、数も規模も大きくなるにつれて、結構さに胡坐を掻いていたんじゃないか。目というのは身体で一番大事なところ、その網膜が剥がれているというのは、私たちの心が親神様の思いから離れてしまっているのではないかと深く反省しました。父にも連絡すると、開口一番「それは親の思いに沿ってないからや。お前たちは真柱様からお許しを頂いて、布教に出させてもらっている身や。その思いにしっかりと応えさせて頂く心をまず作らなアカン」と言ってくれたんです。本当にそっぴと心から思いました。布教に出させ

て頂いている私たち夫婦の、心の置き所を悟らせて頂いた、ふしでありました。

翌日より憩の家に入院、7月30日に手術となりました。その時には帰参者は70名を超えていましたが、私は「80名と心定めさせて頂いていたのだから、このままではご守護頂けない。何とかしなければ」と思っていました。そのため、手術が終わるのを待って、すぐに名古屋へと引き返し、何とか心定めに達するよう、と奔走しました。崖っぷちの思いでいるこういう時って、仕切り根性仕切り力、というのが出るんですね。普段からおたすけに回る家々に事情を説明してお願いをして回った結果、8月2日の団参当日には丁度80名が揃って、おちばへ帰る事が出来ました。非常に嬉しかったです。神様は、



このふしを通して、何とか心定めを成し遂げさせてやりたいんや、という思いを感じ、また未熟な私の心を定める為にふしを与えて下さったんや、と思うと、心から喜ばせて頂くことが出来たのであります。

お道を通る者にとっては、ふしというのは付き物なんです。しかし、心配はいりません。どんなふしも必ず、子どもの成人を望まれる、親神様の深い親心が含まれているのです。ふしをお与え頂いたときにまず大事なのが、自分自身が親の思いに沿い切れているかどうか、ということとを反省し、心を入れ替え、そこに込められた親心を悟り、真実の心定めをして実行していくことが大事なのです。

家内の手術は無事に終了しましたが、治療の為、1年間は出来るだけ下向きで生活するように、とのこと、寝る時も常にうつ伏せで寝なければいけません。大変な生活の中、家内は弱音も吐かず頑張り通しましたが、治療が終わる前には「ああ、早く大の字になって寝たい」と漏らしていました。それを聞いて、改めて当たり前思っていることも当たり前前ではないんだ、としみじみと思いました。人は、日頃当たり前のように享受していることに、なかなか感謝出来ません。失ってから初めて気付くんです。身体の大切さ、親の大切さ、友達の大切さ等々、こ

れは無くした人しか気付けないのでしょうか。人によって当たり前の尺度は違いますが、私達お道の信仰をする者は、教祖に出会わせて頂いている為に、当たり前を喜ぶ方法を教えて頂いているのです。無くしてからは、親神様に申し訳がない。

また「人たすけたら我が身たすかる」と、自己中心的な心を振り払い、人をたすける心に入れ替えて、たすけ一条に通る内に、いつの間にかほこりが払われて、心は晴れ、救われていくと教えて頂いています。教祖は自分の身を措いても、子どもが助かることを第一に通られたのであります。わが身のことは親神様に任せ、凭れ切って通られたのです。

教祖五十年のひながたの根幹は、まず親神様のご守護を感じ取って、報恩の念をもって通る、御恩報じということ。それから、親神様に凭れて通り切る、神一条ということ。そして人をたすけて通る、たすけ一条。これが肝心です。特にこの三年千日では、この部分をしっかりと見つめなおして、ひながたの道を自分自身の道として三年間、神一条、たすけ一条で通り切る、ということを心に定めた、と思うのです。



おちば、教会へ足を運び

教祖がひながたの道を示されてから、現代に至るまでに随分と長い時



間が経っています。その間、世界的情勢や人々の生活様式も変わってきました。お道の草創期の先人から見ると、私たちにとって教祖の存在は、だんだんと遠くになってきているかもしれない。それは否めない、しかしだからこそ、私達の方から教祖を求めて近付いていく事が大切なのだと思います。その中でもこの年祭の句は、より一層意識して通る必要があるのではないかと、思います。

私達の身の回りや世界を見ると、諭達にある「今日、世の中には、他者への思いやりを欠いた自己主張や利他的行動があふれ、人々は己が力を過信し、我が身思案に流れ、心の闇路をさまよっている」という言葉通りの姿が、あちこちに見受けられます。ウクライナ情勢や、また安倍元首相の事件など、本当に現実かと見紛うような事が起こっています。力による平和は成し遂げられていな

い、というのが現実です。私達お道の者は、望みの為に人と傷付け合うのではなく、互いに助け合うような環境にあることが、どれだけ有難いことか、と思います。やはり、我が身さえよければという心ではなく、助け合いの心を持つ、しかも相手にもその心を持ってもらわなければ、根本的な解決にはなりません。陽気ぐらしの考え方を世界中の人に知ってもらうことしか、究極の平和は訪れないと思うのです。今一度「私達にしか出来ない」という自信と責任感を持って、この陽気ぐらしの教えを實踐し、世界中に伝えていかなければなりません。

では何をしていけばいいのか。諭達に具体的な通り方が示されています。「よふぼくは、進んで教会に足を運び、日頃からひのきしんに励みま〜」という部分です。まずは教会長さんをはじめとした方が、本元たるおちばへしっかりと足を運ぶということ。そしてよふぼく信者の方々が、おちばの理を受けた教会へ足を運び、親神様、教祖としっかりと繋がってもらえるように、こちらから繰り返し足を運び、丹精するということが大切です。そして、常日頃は教えを胸に率先してひのきしんに励むということ。これが何よりも大事なことだと思います。

この一週間前、嬉しいことがあったんです。先程述べた、お見合いの

世話取りをした子、これまでに様々な

月の講社祭には必ず参拝に来ていました。その彼が36歳でやっと結婚できた。ただ相手は他宗教の熱心な信

者家庭の人でした。彼は奥さんを講社祭に連れて参拝に来ますが、一方であちらの集会にも参加してしま

きつかけに、二人の家に神様を祀らせて頂くことが出来た。奥さんは、講社祭の日には外出してたりと、

まだまだ熱心とは言い難い状況でしたが、気長に見守っていました。奥さんは目と耳に持病があり、六月に

目の手術が必要になりました。入院の時の保証人をお願いされたのです

が、彼女におさづけを取り次がせてもらい、手術が成功した暁には二人でお礼におちばへ帰るよう、勧めま

した。手術は無事成功、二人で天理の我が家に来て来ました。家内を含めて四人で教祖殿へ参拝し、無事

にご守護頂いた事への感謝を申し上げました。そしてついでこの間ですが、奥さんの方から連絡が来て、「今月の講社祭、旦那は仕事でいませんが、

よろしくお願いします」という事で、私は「ああ、おちばの理やなあ」と思いました。おちばがえりをして、

御恩が分かるようになってくれたんだな、と思うと本当に嬉しい気持ちになりました。おちばというのは本

当に、不思議にご守護を頂く所であ

ります。

成人への道は、神様の御用に

五年前に『天理時報手配り十年感謝の集い』というのがありました。

その時の真柱様のお言葉で「およそ道を信仰している私達の活動は、全

ておちばに繋がってこそ発展のご守護を頂ける」とありました。その言

葉が私の胸に凄く響きました。また『時報の手配りは親神様、教祖の手足

となつて働かせて頂いて、その親心を伝える一つの手段でもある」ともお話し下さいました。あくまでもこ

の手配りというのは報恩感謝、ひのきしん。よふぼくの皆さんに御恩報

じをして頂く為に、手配りがあるんですよ、とお聞かせ頂いたんです。

私達よふぼくは、神様の御用をする中に成人させて頂ける道があると思

います。道友社の出版している『すきつ』には、毎回有名人の方が出て下さっています。その後ろには、

先人達の伏せ込みのお陰で繋がっている、という事実がたくさんあります。例えば、藤山寛美の娘、藤山直美さんは、何故『すきつ』の取材を受けてくれたかという、小さい頃、疎開先の駅に、ハッピを来た人が毎日便所掃除に来ていたそうです。それを見てお母さんが「天理教

には受けなければ、と思ったそうです。ひのきしん、伏せ込みというのは、そういう所にも芽が出てくるのであります。つまり、この道がいくら素晴らしい教えでも、人との出会いがないと始まらないのです。コツコツと人と出会い、伝えていかなければならないと痛感しています。その為にはまず、私達一人ひとりが動くことであります。親の思いを知らない人達に、私達が声を掛けなければ、一生出会えないかもしれない。一言の声掛けが、人の運命を変える、と信念を持って、勇気を出す事が大切です。たとえ繋がらなくても、理は残ります。種まき、伏せ込みをして、少しでも多くのおたすけの現場を持つこと、これが大事です。それはどこに広がっていくか分からない、無限の可能性があります。

また、にいがけ、おたすけにおいて大事なのは、足を運ぶこと、そして、心を繋ぐ、ということです。更には、諭達にもありますが、親身になって、ということが大事です。親の気持ちになって、同じ目線に立って、共に歩む。教祖伝に清水ユキさんという方の、をびや許しのおたすけの話があります。ユキさんは無事に子どもが生まれますが、産後の肥立ちが悪く、生まれ子を教祖がお世話をした、という話です。


「疑いの心があったからや。」と、

仰せられた。ユキはこのお言葉を聞いた途端、成程と深く感銘して、心の底から懺悔した。教祖はその生まれ子を引き取って、お世話をなされた。ユキは程なく全快した。

これを改めて読むと、神様に凭れて通る事の大切さばかり目が行きがちですが、教祖は疑い心で言う通りにしなかつた、ユキさんを責めることなく抱きかかえ、そればかりか赤子を引き取って世話をなされたんです。教祖のこのお世話取りは、底なしの親切であります。教祖伝には「難儀やったなあ」「かわいそうになあ」といった言葉がよく出てきます。

助けずにはいられない、そういった親心を拝する事が出来るのです。ユキさんが二度目のをびや許しを頂く心になったのは、この教祖の親心に感じ入ったからではないでしょうか。

どんな場合でも、足を運び、心を繋ぐのが第一です。その為に我々は徳積み、理づくりの為に、おぢばへ上級へ足を運ぶ。信者さんの元へ足を運ぶ。誠の理を持っておたすけに運ぶ、という事だと思えます。

 真にたすかる道を伝える事

うちの母が導いた、Aさんという熱心な信者さんがいます。母との出会いは45年ほど前になります。当時、私は10歳位でしたが、すぐ

下の弟は喘息が酷く、命に関わる程の大病でした。その中、母は、一番下の弟を負ふつて布教に歩いていました。何故そのようにしていたか、後年、母に尋ねると、母の父が「信者さんをご守護頂かないと、お前の幸せはないぞ。家で苦しむ子ども背中をさすついても何もならん。おたすけに出させてもらえ」と言われたというのです。

そんな母が、憩の家にいかけに行つた。そこにはAさんの次女が脳腫瘍で入院していた。はじめは顔を見るのも嫌だと言つて、断り続けたそうです。しかし、幾度も来る中で、病室の他の患者は次々と亡くなり、心細くなつてきた時に、初めて母の話をお聞きしました。一週間後に次女は亡くなり、Aさんは埼玉に帰りまして、母はそれからAさんと文通を始めた。そして何度も何度も埼玉まで足を運んだんです。その内Aさんは奈良へと引越し、実家の講社祭に参拝を重ね、今は熱心な信者となつています。そのAさんの千葉にいる弟さんが癌になり、Aさんは新幹線でおたすけに向かいました。車内でふと、同じように運んでいた母の姿を思い出し、「奥さんはこんな思いで

毎度来てくれていたのか。素っ気ない態度でいた私は、本当に奥さんに申し訳なかつた」と、新幹線の中で涙が止まらなくなつたそうです。


別席の話にも「日々尽くす理運ぶ理より、立つ理は他にない」とあります。本当に理を作る、というのは日々の運び、苦勞してこそできるのではありません。このAさんも、四十年目にして理の親の思いを分かつてもらえた、というんです。育てていく方は、余程気長い心を持たなければダメなんです。おさしづに「一年経てば一年の理、二年経てば二年の理、三年経てば三年の理。」(明22・4・17)とあります。年限の理、というのがあるんです。Aさんご主人が反対で、長らく神様をお宅にお祀りしていませんでしたが、今年になつてご主人が許してくれて、神様をお祀りしました。ご主人の心が変わったんです。変わるんです。ご守護頂けるんです、この道は。

この道のをいかけ、おたすけの目標は、真にたすかる道がある、という事を伝える事です。世界の常識では測れない、天の定規に沿つた通り方をすることで、運命が変わる、ということなのです。このことを自信を持って、私たちは伝えなければなりません。

また諭達には「その信仰を受け継ぎ、親から子、子から孫へと引き継いでいく一歩一歩の積み重ねが、末代へと続く道となるのである。」とあります。しかしこの、信仰を子どもに伝える、というのは、なかなか容易なことではありませぬ。私自身の事を言えば、

母が必死になつて通る姿を私達兄弟に見せてくれ、共々に動いてくれたことが有難かつた、と思ひ返すのです。特に理立て、理作りに関しては、幼い頃より幾度も言い聞かせられました。「理作りは神様との繋がりをしっかりと持つこと。つまりん事を毎日コツコツとすることで、いざという時、神様との道筋が詰まらずにスツと通り、ご守護を頂ける」と、分かりやすく何度も話してくれました。また、本部の夕づとめ

の後には、私達兄弟を連れて毎日便所掃除に行きました。そのことを後年聞くと母は、「あなた達に徳を付けさせてやりたかつた」と言いました。私達兄弟が今あるのも、母のお陰だ、としみみ思つたのです。「危ない事、微かな理で救かるは日々の理という。」(明26・4・29)というおさしづがあります。日々、神様に心を繋ぐ事が肝心なんです。毎日続ける事は簡単ではないですが、教えを素直にやってみる、その心を神様が受け取って、間違いないご守護を下される。これが信仰の道であります。

 『助かりたい』から『助けたい』へ

この句によぶべく一人ひとりがにをいかけ、おたすけ、ひのきしんの出来る人へ成人するよう、まずは道の先達たる私達が率先して実践に励み、丹精につとめさせてもらいたいと思ひます。親神様、教祖にお喜び

頂く為には、まず諭達の精神を心に納めた一人ひとりが、たすけ一条に歩む具体的な心定めをさせてもらう、これが第一です。夕張大教会としても、年祭活動の方針と、具体的な目標を定めて、陽気ぐらしの進展を目指して、三年千日の歩みを進めていく事を申し合わせていただきます。さらには、各教会では大教会の方針に沿つて、自ら仕切つて目標を定め、実動する事、この句に相応しい成人を目指して頂きたいと思ひます。おさしづに「どうしても一つ、仕切り根性、仕切り力、仕切り智慧、仕切りの道、どうでもこうでも踏まさないやならん。」(明40・5・8)とあります。親神様から頂いた成人の句、どうでも通らして頂かなければ、と自分自身の心を仕切る、ということが大事であります。年祭はたすけの句、成人の句です。成人とは、親の思いに近付くということなんです。子どもの心は助かつて喜ぶ、親の心は助けてその助かつた姿を見て喜ぶ、であります。『助かりたい』から『助けたい』への心の転換が成人であります。私達人間に出来る事は、種時きと肥をやる事だけ、それを今時かずしていつ時くのか。句を外さないように、しっかりと思索をし、皆さん銘々が具体的に心を定め、三年間仕切る覚悟を決めて、たすけ一条の道を歩ませて頂きましょう。

(文責 藤崎実)

もう15年近く前に、大教会にお当番に来られた小野寺先生から、「何にも出来なくなったわあ」と言いながら、昔話を聞かせてもらった。

先生は南阿部属の山部分教会に生まれましたが、当時流行の肺病を患い、クスリも手当てもないところから、修養科に入った。103期生、当時南阿は撫養部属で、兵神の隣だった。

肺病で弱っていて、修養科にも行くのがやっとなで、余り動けなかった。しかし、助かりたい一心で、教養の先生に、どうしたらいいか聞いた。すると、「陰徳を積みなさい。肺病はハイハイと這い上がって助かるというから、低い所に身を置くのが肝心。まず皆が寝静まった夜中に、トイレ掃除をさせてもらいなさい、身

体は段々と御守護頂くから」と教えられた。

一筋の光明を見いだしました。それから、深夜、板葺きのトイレの雑巾がけを始めた。少しずつ拭けるようになると、嬉しくて、心の底から有り難さが湧いてきて、病気を忘れて務められ

夜中に、「梅子さん、私もトイレ掃除に連れて行って」と言う。這ってトイレに行くが、雑巾も絞れない。絞ったのを持たせて、少しずつさせてもらいなさい、と言うと、泣いている。「梅子さん、私もひのきしんが出来ると」。

私も助かるかわからないけど、お世話取りは続いた。

ひのきしんのお陰で、修養科中に、私はすっかり肺病の御守護を頂いた。何年か後に、詰所で同室だったリュウマチの方にバツタリ会った。丸々と太った男の子を抱いて、笑顔に溢れていた。私は「アラ、良かったわねえ」と言って、これがおたすけの喜びなんだと、心から感じたことでした。(文=藤崎実)

小野寺梅子先生を偲んで

ました。一カ月でかなり身体も良くなって、同期の人も見違えるようだわと言ってくれました。

同室の方のお世話も出来るようになり、手も足もリュウマチで曲がった、自由の利かない方でした。ある



教区行事にも参加し、交流を深めました

第30回女子青年大会

11月27日、本部中庭で第30回女子青年大会が開催された。コロナの影響がありながらも、全国各地から大勢の若き道の台が参集し、おちばに可憐な彩りを添えた。

夕張支部からは、6名の女子青年会員が参加した。25日から28日までの期間には団体を組み、ジャンボタクシーで、空港から詰所まで送迎するなど、安心安全なおちばがえりとなるよう、高橋委員長はじめとするスタッフ全員が、真心を込めてお世話取りにあたった。また、期間中には、別席者を2名お与えいただいた。年祭活動へ向かう意義深い時旬に、親神様、教組にお喜びいただける、尊いご守護を頂戴し、楽しさの中にも、勇み心溢れる大会となった。

(文=岩佐善昭)

庶務部

11月
▽初席
中右しずく(理喜道)

▽修養科975期修了
高橋悟志 (祝梅)

▽修養科978期新人生
森下良昭 (北張)

▽おまもり 1件

12月
▽詰所ひのきしん
・餅つき

矢野明子(上富良野)

・詰所照明設置
松尾澄夫 (継立)

松尾大輔 (継立)

松尾陽介 (継立)

▽初席
真鍋 萌 (祝梅)

▽修養科976期修了
竹田 愛 (馬追)

▽おまもり 4件
竹田元 (馬追)

12月
▽詰所教養掛
1~2月 梶川創一郎 (新生生)

11月
1日 たすけ推進会議

4日 会長、支部例会、組例会

6日 会長、由仁分巡教

7日 会長夫人、幌部分巡教

14日 前会長、札美分へ

15日 月次祭準備

14日 月次祭 新穀感謝祭

15日 秋季御霊大祭 神殿外壁雪囲い

17日 本部巡教準備(18日)

19日 本部巡教

23日 会長、おちばへ

23日 ことも食堂開催(子供30数名、大人合わせて50数名来場)

24日 会長、本部神殿当番

25日 前会長、おちばへ

26日 会長夫人、前会長夫人、おちばへ

27日 本部月次祭

27日 会長、かなめ会

28日 会長夫人、前会長夫人、女子青年大会

12月
1日 会長夫人、帰会

28日 会長、前会長夫妻、帰会

1日 たすけ推進会議(オンライン)

6日 会長、保護司定期研修会

9日 会長、中学同窓会長用務

14日 月次祭準備

15日 月次祭

19日 会長、前会長、札美分参拝

23日 会長、布教の家育委員会

23日 会長、おちばへ

24日 会長、本部神殿当番

26日 本部月次祭

27日 会長、帰会

29日 大掃除・餅つき

31日 元旦祭準備

大教会日誌抄